

# メバチ インド洋

## Bigeye Tuna, *Thunnus obesus*

### 管理・関係機関

インド洋まぐろ類委員会 (IOTC)

### 生物学的特性

- 寿命: 10~15 歳
- 成熟開始年齢: 3 歳
- 産卵期・産卵場: 周年・表面水温 24℃以上の海域
- 索餌期・索餌場: 4~9 月に南半球温帯域に現れるほか、温帯域と熱帯域を複雑に回遊
- 食性: 魚類・甲殻類・頭足類
- 捕食者: まぐろ・かじき類、さめ類、海産哺乳類

### 利用・用途

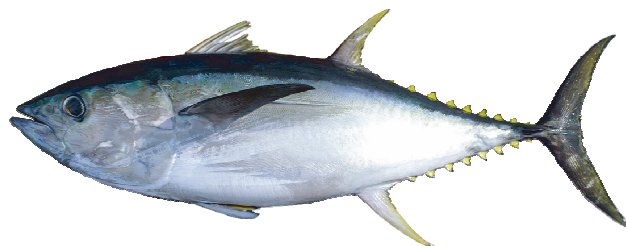
刺身や缶詰原料

### 漁業の特徴

本種ははえ縄(2 歳以上対象)とまき網(0~1 歳対象)で主に漁獲される。本資源の漁業は、1952 年にジャワ島南部海域で日本のはえ縄漁船が開始した。その後、台湾・韓国・インドネシアのはえ縄漁船がそれぞれ 1954・1965・1973 年から参入した。最近 10 年の漁法別総漁獲量は、はえ縄が 7~8 割、まき網が 2~3 割となっている。まき網開始 (1984 年)前は、大半の漁獲は 2 歳魚以上であったが、まき網開始後、0~1 歳の漁獲尾数が急増し、最年では総漁獲尾数の 7 割近くを 0~1 歳が占める。

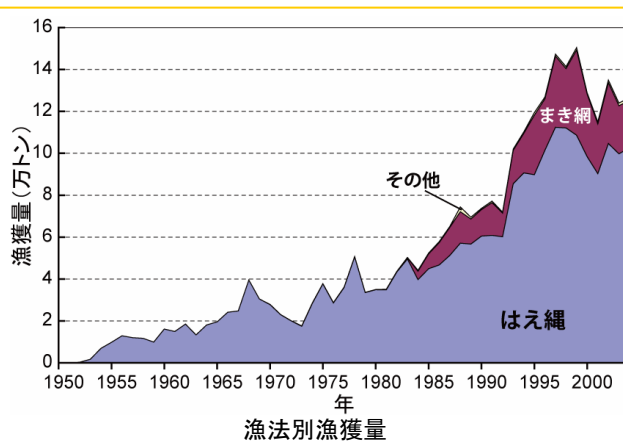
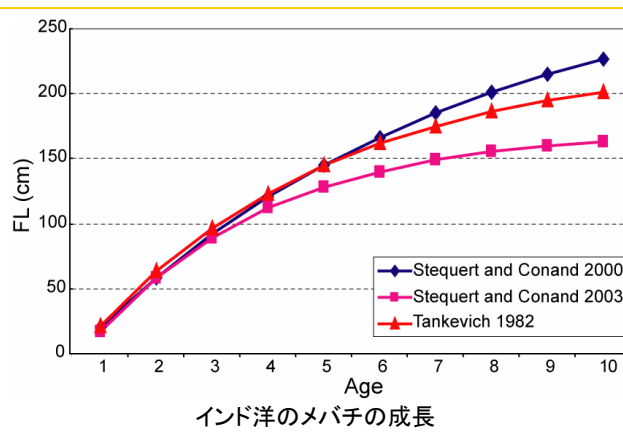
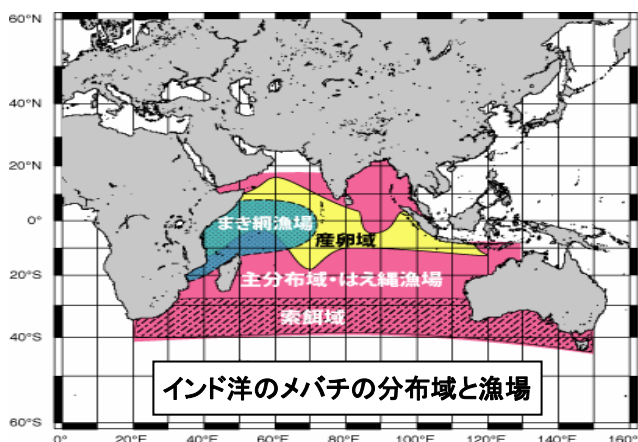
### 漁獲の動向

はえ縄による漁獲量は、操業開始以来緩やかに増加し、1978 年に 5.1 万トンに達した。その後は 1992 年までは、3.4 万~6.1 万トンの間で増減したが、翌年から急増し、1997 年には 11.2 万トンのピークに達した。しかし、1998 年からは減少傾向にあり、2004 年には 10.3 万トンになった。一方、まき網漁業は 1984 年より西部インド洋で本格的に始まり、漁獲量は徐々に増加し、1999 年には 4.1 万トン(ピーク)に達したが、その後減少し 2004 年には 2.3 万トンとなった。まき網の主要漁業国はスペイン・フランスである。総漁獲量は、1986 年までの 6 万トン以下から徐々に増加し、1993 年に 10 万トン台、1999 年に 15 万トン台(ピーク)に達した後、2000 年から減少傾向が続き、2004 年には 12.7 万トンになった。



### 最近一年間の動き

台湾は、はえ縄船のロンダリング(大西洋漁獲量の一部をインド洋の漁獲量として虚偽報告)の制裁措置として、漁獲割当てが 3.5 万トンに設定された。



## 資源状態

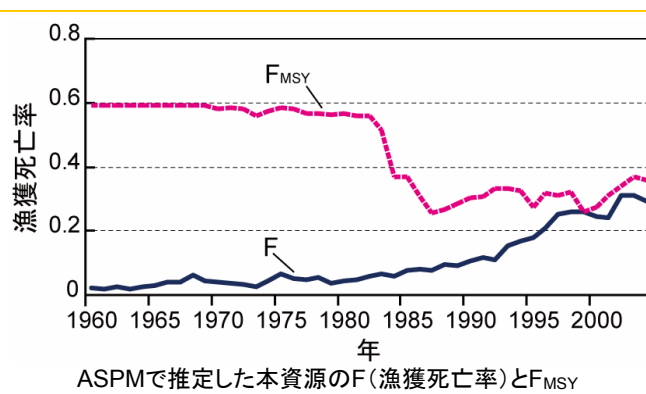
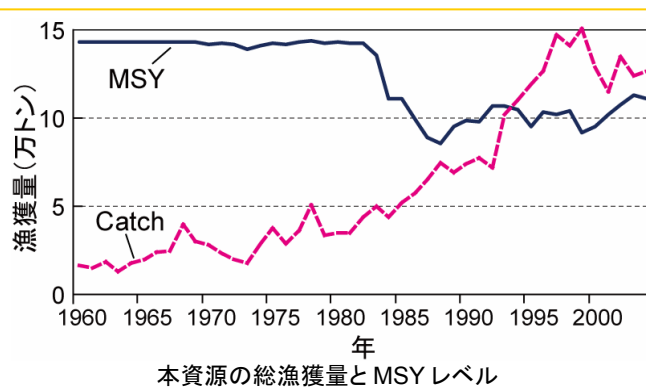
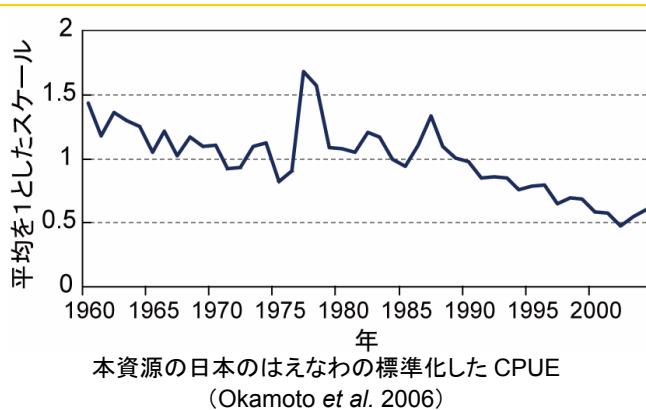
本資源の評価は、1998年以前はIPTP(インド洋・太平洋まぐろ開発管理プログラム)、1999年以降はIOTCで、プロダクションモデル、はえ縄 CPUE 解析、VPA(コホート解析)、ASPM(年齢組成プロダクションモデル)などで行っている。2006年のIOTC第8回熱帯性まぐろ作業部会では、ASPMで1960~2004年のデータを解析した結果、MSYは11.1万トンと推定された。漁獲量は12年間(1993~2004年)、最大4.0万トンもMSYレベルを超えた状態が継続し、過剰漁獲状況にある。

## 管理方策

メバチについては、今後、全漁業(はえ縄・まき網ほか)で漁獲量をMSYレベルまでに削減し、漁獲努力量を2004年レベルを超えないようにし、さらにFADsを利用したまき網漁業の漁獲努力量を削減する必要がある。また、台湾の漁獲割当を3.5万トンとした。メバチ以外も関連する管理方策としては、漁獲努力量の凍結、違法・無報告・無規制(IUU)漁業対策の推進、トリポールの設置、24m以下の小型船へのポジティブリスト適用が挙げられる。

## 資源管理方策まとめ

- 漁獲努力量の凍結
- 漁獲量のMSYレベルまでの削減
- 違法・無報告・無規制(IUU)漁業対策
- 台湾はえ縄漁獲割当(上限3.5万トン)
- 他国漁船の受入制限
- はえ縄船トリポール使用(南緯30°以南)



## 資源評価まとめ

- ASPMによりMSY11.1万トンと推定
- 1993~2004年においてMSYを越えた過剰漁獲
- FADs使用のまき網で小型個体の過剰漁獲の懸念

## メバチ(インド洋)の資源の現況(要約表)

資源水準	中位
資源動向	減少
世界の漁獲量 (2000~2004年)	11.5~13.5万トン 平均:12.6万トン
我が国の漁獲量 (2000~2004年)	1.1~1.4万トン 平均:1.3万トン